芸才振

大分県芸術文化振興会議会報

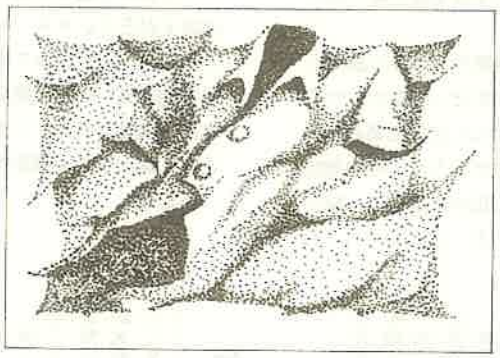
No. 37　52. 12

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・辻　英武　編集人・浅田弘明

大分を新しい演劇の王国に

大分県芸術文化振興会議顧問　米田貞一

私は若いころから演劇が好きで、学生時代にはよく劇場に通った。歌舞伎から新築地、時には浅草の芝居まで見て歩いたが、それぞれに面白く、たのしかった。しかしその時代の歌舞伎や新劇はまだ一部の人のぜいたくな遊びか、先鋭的な試みでしかなかったので早く全国にいい劇場や演劇研究所ができて、みんなで演劇をたのしみたいものだと夢のようなことを考えていた。



白いドラマ
自由美術協会会員
県美協運営委員　十時良

地方に住んでいると、適当な施設もなく、よい芝居を見る機会も少ない。ちかごろはテレビでドラマを見せてくれるが、やっぱり劇は舞台でじかに見、自分でやってみなければだめである。よく言われるように、演劇は総合芸術であり、俳優と舞台と観客が一つになってはじめて成立するのだから、表現と鑑賞が平行することが大切である。

さいわい戦後の大分県では、演劇活動がたいへん活発である。高文連のやっている高校演劇は二十数年も続いているし、青年団の演劇も盛衰はあるが水準は全国的に高い。一般人の演劇も盛んになって、特に最近数年間の県民創作劇はどこへ出しても恥ずかしくない出来ばえである。その内容も郷土に即したもの、身近な生活から問題を取上げたものが多く、演技も熱心で、演出や舞台装置、照明にもいろいろ工夫がこらされていて、各分野とも進歩のあとがいちじるしい。

もともと演劇活動は人間の本能的なもので、幼児のものまねごっこや学芸会の劇など楽しいばかりでなく、人間の成熟に欠かせないものである。それが演劇という総合芸術になり、舞台で演じられる以上、当然、客観的な評価を受けなければならない。演劇をやる人も、見る人も劇によって感動し、新しい世界を創造するとき、はじめて演劇はみんなのものとなり、生活と文化になくてはならないものとなる。

大分県のこれからの演劇を考える時、私たちは今日まで続いた高校演劇をいつまでも発展させ、青年演劇の情熱をさらに盛り上げ、県民演劇の聖火を燃やしつづけたい。待望の県芸術会館をはじめ、各地の文化会館・公民館もつぎつぎに完成した。これらをフルに活用して、高校生から成人までの連帯で、互いに励まし、助け合い、批判し合って全国にも珍しい演劇の王国をこの地にしっかり築き上げたいというのが、私たちのたのしい夢である。

（[redacted]）

大分県演劇の夢

高校演劇

演劇を通し鋭く社会を見る目を

青田　章
別府商業高校長

高校現場では今もって演劇とか演劇部とか言うのに少し気を使う。大多数の関係者は、「何に何に」と膝をのり出すよりは「厄介なことを言い出さんでくれ」という空気なのだ。子供（生徒）も変人なら大人（教師）も変った奴が多いということだろう。それかあらぬか今年の中央祭で出演校は21もあったが、私は何も判りませんので、引率要員ですと言訳する教師が可なりあった。

大分県は面白い県だ。体質は物凄く保守的だが、スト批准率は全国屈指である。 つまり、 逆う意味で権力に弱いのだ。本当のリバティーがない。反対なら反対で凝り固まり、賛成なら賛成で右へならえだ。

高校演劇にもそれが現れている。飛躍や、試みに敢然と取り組む人は限られている。従って10年たっても大した変化がない。今年の創作で一席にえらばれた大分工業の「さようなら僕達の瓜生島」は生徒の創作だそうだ。その意味で大拍手を送りたい。大分鶴崎の上東氏が意欲的に「緑の館」を執筆されたが結果はもう一つであったといえ、これだけの筆力と指導力を持った人が他に多くないのは物足らない。貴重な存在である。

今年審査員のうち１名は、東京から米本一夫氏（日大講師）が招かれたわけだが、氏の批評を聞くうちに地方と中央との演劇観の相異を感じないわけにゆかなかった。私達地付きの者はいわゆるソフィティケイトな芝居が出来ない。出来ないことは恥ではないが、テンでそこに思い及ばないのは少々恥だ。矢張り刺激が少ないのか、風土性かなと思ったりする。

ここ10年を通して目に付き出したのは音響と照明の技術の向上だろう。マス・メディアのお蔭に相異ないがほとんど全国レベルと言ってもよくなったのは、文化会館やその他各地に良い小屋（劇場）が出来た為と感謝したい。私達は高校演劇でタレントを養成している訳ではないし、そうあっては大変だが演劇を通して鋭く社会を見る目は育てたいものだ。

発表の「場」に悪戦苦闘

県高文連演劇部長　佐藤邦明

「演劇の三要素は演じる人、演じる場所、観る人である」という定義があります。この「演劇」の上に「高校」の二文字を加えた「高校演劇」の現況において、この三要素はどうなっているのでしょう。

部員の減少、とりわけ男子部員の減少、男子部員皆無の部の増大等の問題のある「演じる人」、各学校の校内発表会はともかく、県の発表会の「観る人」の少なさなど、この二要素についても多くの問題はあるのですが、なんといっても一番大きな問題をかかえているのが「演じる場所」なのです。

演じる場所は、第一段階ではもちろん各学校の体育館です。文字どおり「体育館」であって劇場・ホールではありません。狭いステージ、最悪の音響条件、どうしても明りが大量に入る遮蔽設備、貧弱な照明器具等々、演じる場所としての条件をことごとく欠いている場所です。この悪条件に悪戦苦闘して克服し、あるいは涙をのみ、校内発表会を開くわけです。

が、問題は県大会です。二日、三日間にわたる会を学校の体育館を借りて開くのは種々の問題があり、やむをえない場合に限られます。それでなくても、条件の良い所で演じることが最大の勉強になるのです。たしかに、条件の良いホールが各地にできました。 が、 その使用料の高いこと。高校演劇に対する料金割り引き等の恩典は全くありません。土曜、日曜の二日にわたる会を開こうものなら使用料だけで十五万円。雑費を加えて二十万円。しかも、県下二十数校の演劇部が出場するためには三会場が必要です。六十万円。高文連演劇部の事業費は三十五万円なのです。

最低の条件を備えた客席三百程度の、料金の格安の小ホールが欲しいのです。これが高校演劇当事者の夢であります。

青年演劇

終戦直後の文字通り全国津々浦々までのヤクザ芝居が、昭和二〇年後半にかけて職場、青年演劇と発展し、三〇年代の衰微をくぐりぬけて、地味ではあるが堅実な現在までの演劇活動の歴史を省りみて感一入のものがある。

そのこしかたをふまえ、今後の本県青年演劇のあり方を思うに、二豊の若者でなければできない、それ故にこそ郷土の人達を心の底からゆすぶることができる、そんな演劇を目ざしたいものだと。そのためには、ふる里を愛し、みつめ、そこに生きた、又は生きている人々との心の交流にこそ着目すべきであると。そしてそれがこれからの我々の生きざまを教えてくれるであろうし、むらづくりの情熱にもつながるのではあるまいかと。

なによりもお芝居が好きであること。それだけでもよい訳であるが、観客がいる以上これを説得し楽しんでもらうための基本的学習が当然求められる。本県には演劇愛好の若者が数多くいる。県代表として全国大会に出場した津久見、中津江、天ケ瀬の青年たちには多少の助言を申しあげた仲間だが、そのほかにも大分は勿論、国東、南郡、大野、直入等々、演劇の同志たちが沢山いる。又、職務柄、佐賀、長崎、宮崎等九州各地の演劇青年たちとも接触をもっているが、彼等がひとしく求めている事は、情報交換と連携である。演劇愛好の青年たちが手をつなぎ、技を競い、各々が創り拓いている道をたしかめ合う協議会が待たれる所以である。

県段階の会の結成が急務であるが、これを核に九州全域に発展させて欲しい。その輝かしい青年演劇の歴史からしても、九州のリーダー県としての自負は決して不遜ではないと思うし、毎年、本県で九州大会が催されるというわたしの夢を、夢のままで終らせないで欲しいと、ひたすら願うものである。

[redacted]

郷土の人の心をゆすぶるもの

劇団「みずぐるま」顧問
国立阿蘇青年の家・主任専門員　菅沢活水

演劇活動に青春の情熱

平岡敏彦
県連合青年団文化部長

青年団の中で演劇活動について深く掘り下げていけばきりがありません。全国大会まで私は年間を通して演劇に取り組むサークル団体と私達青年団とでは最初からレベルは同じには出来ないと考えていました。それが審査発表で先生方が言われたことを聞いた時、もう一度原点にかえってみる必要があると思ったのです。先生方は「毎年この全国大会の審査にたずさわっているが、全国の青年団の中で、今何が一番問題になっているか興味があります。二、三年前までは創作劇の方が重要視されていましたが、最近はその傾向がなくなってきました。既成作品の中からも優秀なものがある」と言うことですが、脚本をそのまま自分達の演劇として発表するのではなく、地域に最も適したものに作り変えてくる青年団が多くなったということでしょう。県下の青年団の中ではたしてそこまでやっている青年団がどれだけあるか疑問に感じます。何もそこまでする必要があるのかという意見もありましょう。しかし、同じやるからには完全な姿までには無理ですが、それに近い線までにはという考えをリーダーがもっていれば一人一人の団員に納得のいくものが残るような気がします。目標に到達するまでいろんな問題が重なり、途中で挫折する人もあるでしょう。

仕事を終えて青年活動に取り組む私達です。そんなことを言っても理想像だと考える人もいれば、実際経験した団員もいるでしょう。何も活動の中で演劇が全てではありませんが、一人ではやれないおもしろみが演劇にはあるのです。

今年の全国大会を振り返ってみて、賞を勝ちとるという目標の高さが少しは理解できたような気がします。今年も島根県、北海道、新潟県が最優秀に輝き、今後そういった他県とも交流を深めていきたいと思います。県下の青年団活動の実情は地域によって特色がありますが、二度とない青春を悔のないものにしようではありませんか。

[redacted]

自立演劇

〝演劇教室〟の開講へ

中　沢　とおる
県芸振会議理事・県民演劇制作協議会事務局長

県民演劇「扉を開く人たち」の本公演をおえてほっとしている。県民演劇と呼称してから4作目だが、「沈んだ島一」からだと5作になる。5作というのは1つの大事な節目だ。そう思ってキャッチフレーズに〝大作〟という言葉をつかった。果たして〝大作〟になりえたか、観者の御批評を待たねばならぬが、創った自分としては、ある充足感に浸っている。

総合芸術としての演劇を支える力を一口にアンサンブルというが、簡単なことではない。芝居好きは揃って自己主張が強い。プロ劇団では劇団の綱領があり、そこに生活の場がある。それでもアンサンブルは難しいのだ。雑多な職業をもち、千差万別の生活の場をもった素人の芝居づくり集団は、それこそ1つ歯車が狂うとこわれてしまう。それをこわさずに持続発展させるには、舞台での強烈な自己主張力と同時に、その自己主張力を、自己の人間形成として謙虚に、日常生活で内面にむけてコントロールできる知性がいる。私は演劇集団を知性の集合だと考えている。日本の新劇運動の足跡からみてもそれはあきらかだ。

大分での高校演劇の発展は喜ばしいが、そういう意味のアンサンブルをつくるにはあまりにも学校という場は恵まれている。それだけに真のアンサンブルを学びとる努力をしてほしい。高文連演劇コンクールの今年の盛況に、そうした真の力が加われば広がる裾野への私たちの期待は大きくなる。

同時に、創造する手段としての表現力を、高い水準にもっていく努力が必要だ。いまの大分の演劇集団が井の中の蛙で、どんぐりの背くらべを、おしゃべりしあうことをやめて、中央のすぐれた演劇人に学び、相互の批判と励ましでレベルアップをはかるため、〝演劇教室〟来春開講という構想を私たちはもった。幸い県民演劇は、大分のすぐれた知識人、芸術家の層の厚い力で守られている。5作目の成功は、大分県演劇の展望に、なにかそうした現実的な夢を持たせてくれたような気がするのである。

県下各地に自立劇団センターを

劇団・つみ木座　佐藤至良

「つみ木座」は自立劇団として昭和三十二年、発足した。以来、上演回数は三十四回に及び、毎年、春秋二回の公演をこなしている。私は創立以来、関係し、その消長をみているが、二十年の歴史に常に、人、金、稽古場、保管場所に関する悩みがつきまとって来た。他に古い自立劇団は別府の「しだか」、玖珠、犬飼などあるが、いずれもこの問題に悩まされているように聞いている。

自立劇団員は他に職業を持つ。職場、家庭生活にまつわる色々な問題をかかえながら多大なエネルギーを要する演劇活動を続けるのは容易ではない。演劇は集団芸術だからキャスト、スタッフの一人が欠けてもその創造活動に大きな支障が起る。自己を取りまく環境上の問題で顔を出せなくなった団員がふえて、活動が困難になっている自立劇団も多い。更に劇団員には財政的な負担がかかる。舞台、稽古場の会場費、装置や衣装、照明、効果の費用、これらは団員のきょ出する会費でまかなわれる。公共の稽古場が少ない所から場所さがしに苦労する。上演ともなれば観客動員が大へんである。観客なしでは演劇は成り立たない。公演が終れば道具の保管場所に困る。団員の個人的犠牲において場所が提供されている現状である。

私の夢は次のようなものである。県下の方々に公営の自立劇団センターがあって、いくつもの劇団が同時に使える稽古場、舞台、倉庫などが集中し、予算的にも裏付けられて、職場や家庭の充分な理解のもとに劇団員が集まり、相互の研修、交流を行う。センターは自立演劇協議会の自主的な運営にまかされ、相互の研修成果を発表し合う上演は、理解ある恒常的な多数の観客層に支えられ、劇団と観客の交流のうえに、より高い作品が生み出されていくといった内容である。

県演劇界の大同団結を望む

尾　立　卓　道
九州高校演劇協議会事務局長

県下全域といってよい程文化会館、市民会館等芸術文化の振興に啓発される幾多の公共的施設等が完備されたことは大変喜ばしいことである。特に本年度は県民待望の大分県立芸術会館の完成をみたことは特筆に値するものがある。しかしこれらの施設が芸術文化活動の領域として、今後如何に有効適切に利用されるかは検討すべき課題である。

文化活動には種々のジャンルがあるが、総合芸術であり、美の創造を舞台に具象化する演劇について考察してみたい。現在県下全域に演劇に取組んでいる組織は相当ある。自立演劇・青年演劇・職場演劇・学校演劇（大学・高校）・児童劇等それぞれの組織の中で毎年活動され公演されている。勿論それはそれなりに大変結構だと思うが、かねてから懸案であった大分県演劇協議会（仮称）とでもいう組織化を考えてみては如何？　異質的な組織の中で現在取組んではいるが、大同団結するためには条件整備や人的関係や困難な諸問題があることは事実である。しかしそれを克服して一本化し全県的視野に立って演劇活動は実現出来ないものだろうか。毎年開催されている「大分県演劇祭」の運営、性格、今後のあり方についてもよりよい方策が考えられるのでは……。少なくとも「大分県演劇祭」という形で過去何回か開催されたがこのあり方についても再検討の時期がきていると思う。会場の問題、開催地、参加団体、観客動員等種々の事項があげられるが、演劇愛好者が既成の機構を基盤によりよい意見を総合して地域文化活動の発展と、舞台芸術を広める運動にも関連があると思う。最近情報化社会の影響で人間は考える機会を失いつつあることは誠に残念である。これにはいろいろの原因もあるが……。せめて県民の関心を高めている演劇は、内容を観て楽しむこと、ドラマを通してその内容をどう理解してもらうかが大きい問題として存在している。それが如何に小さい活動であっても、県民に対して文化の伝授者としての責務であり、県民と共に人間の問題を考えていく方策ではなかろうか。それは何も行政の責任でもない。現在演劇活動を続けている各組織が全力を結集して、種々の困難を克服して組織化に踏み切ってみては如何でしょうか。毎年開催される芸振活動の一環である「大分県演劇祭」もここらで脱皮し飛躍発展の機会が得られると思うが……。

[redacted]

芸術会館での演劇活動を活発に

県立芸術会館
学芸第二課研究員　渡　辺　覚

タテが七・五m、ヨコが一八mの絵があったら、これは何号位の絵だろうか。何千号の絵に違いない。実はこの大きさが県立芸術会館の文化ホールの額縁の大きさです。そしてこの大きさの、ほぼ二倍の広さがホールのステージ床面積です。およその大きさや広さが、理解いただけるでしょうか。

この舞台空間に天井から、いろんな吊物が吊りこまれていますし、また吊りこむことが出来ます。舞台下手にある綱元の数は全部で三五本あります。それから舞台になくてはならない照明のことですが、最新の調光卓が設置されています。一八〇の照明回路とそれを操作する六〇本のフェーダーがあります。音響調整等にも、これまた、ぜいたくすぎるくらいのメカニズムがセットされています。

ところで、演劇というものをドラマとして、広い意味で考えるとき、つまり額縁の中で行なわれる、対話と行動により芸術的に追求されるものと考えれば、演劇はごく、単純なパントマイムから、複雑なチームプレイを要する集団芸術であり総合の芸術であります。

しかし、残念ながら、ながい間、高校演劇や青年団演劇、それにアマチュア演劇でも同じ傾向があったわけですが、その総合性の追求が、セリフと動きの追求にウエイトが置かれ、照明、舞台装置、その色彩、音響効果等の面で、練習会場や上演場所の物理的制約により、心ならずもそれを犠牲にせざるをえない事情があったわけです。しかし、これからは違うわけです。それを解決するものとして、思いきり広い舞台空間と舞台機構が県立として用意されたわけです。

これはひとつの例ですが、十一月に高校の中央演劇祭が、このホールで行なわれましたが、そのとき、メカニズムに強い裏方をする生徒がおおぜい、目をかがやかして、音響室や照明室で活躍していましたが、実はこう言った分野まで、これからは、どの演劇グループも、綿密な追求と計算を、この県立のホールを使って、演劇のきびしい総合性のレベルアップをはかってほしいものです。

[redacted]

専門演劇

ささやかに……夢

吉四六劇団造形劇場主宰　野呂祐吉

造形劇場は創立以来一貫して教育の原点を求め、農業と演劇の創造的統一を目指し、日本一の小回り劇団を自任して活動した。大分に帰って十一年間の公演記録を見ると、公演回数二、〇四八回、観客数七九五、三五〇人。内訳は小学校公演一、三七五校、中学五三一校、高校三三校、一般公演一四八回、幼稚園二一九回、老人無料招待四七六回である。演目は狂言「附子（ぶす）」、「しびり」、「吉四六さん」、「狐と代官」、「マテオ・ファルコネ」、「医者と雷」、「豆腐屋の四季」、「ひそやかに……うたう心よ……それは…」その他であるが、圧倒的に上演の多いのが「吉四六さん」と「附子」で一、五〇〇回を越えている。

創立理念である農業と演劇を創造的に統一させる為、ささやかではあるが次の様な構想を練っている。先ず此処野津の本部の周囲を約一町歩に拡張し、自然農法による農と、小動物を中心とした放し飼いをする。その為目下山羊四、羊二、七面鳥三、チャボ一五がいる。今後馬、牛、豚、鹿、鶏を入れる。そして小さな木造の劇場を建てる。又米も野菜も卵も肉も乳も味噌も醤油も劇団手造りの「ほんとののめしや」を開く。やがては鉄とコンクリートに囲まれた都会の児童生徒や家族連れが、或いは又益々近代化され行く農村の人々も此処を訪れ、直（じ）かに作物にふれ、動物達と遊び、「ほんとののめし」を食べて、「吉四六さん」の芝居や「神楽」などを観て行くようになるだろう。

今日の日本に欠けるもの、それは哲学であるように思う。自然界の平等なる一員としての人間として、「如何に生きるべきか」人間優先、科学万能を旗じるしに平然と自然を破壊して来た人類の、今後のほんとの生き方の意味を探る為、以上のような夢を描く。そしてこれは代々家の教育目標として又家の芸として伝承される様になるものと信じている。

児童劇

ほしい児童文化会館

二宮敬介
県中央児童相談所・児童福祉司

現在大分で児童劇部門として活動しているものとしては「大分子ども劇場」と「人形劇活動」が代表的なものと言えよう。「大分子ども劇場」は観劇を主体にしての活動であり、「人形劇」は人形劇を演じ子どもたちへ夢をはぐくむ活動である。両者とも子どもたちにとって大切な活動なのだ。現在の大分の文化活動は実にめざましいものがあり各部門の文化活動を見ても「県民オペラ」「県民演劇」と県民のものとして大きく発展している。児童劇部門としても多くの子どもたちが、自分たちも参加し、大人といっしょになって活動できるものが生れてもよいのではなかろうか。りっぱな県芸術会館も出来、大人たちの活動はより大きく飛躍して行く中で、子どもたちへの文化活動がややもすると忘れがちになっているきらいがないではない。他県にみられるような子ども専用の児童文化会館が大分にもあってよいのではないか。児童文化会館に行けば常に健全な児童劇や人形劇が観られ、必要な資料も展示されていて相談コーナーもあり、子どもたちが喜んで利用し、児童文化活動にたずさわる者たちも安心して活動ができると思う。今年の芸術祭行事の中で相互の団体が助け合ってすばらしい舞台を観せてくれた作品がいくつかある。オペラ、演劇、舞踊、器楽、合唱等が力を出しあい協力しあえば「子どものためのミュージカル」をこの大分で作り、公演することは不可能ではあるまい。又、各部門がこのような公演とは別に子どもたちのための公演を考えてみてはどうだろう。例えば「子どものためのオペラ教室」「子どものための演劇教室」とか。子どもの時に観賞したすばらしい作品は大人になるためのりっぱな栄養源である。児童文化は健全な子どもを育成し、ひいては身心ともに健康な大人へと成長していく。今一度こいらで大人たちは児童文化について考えを新たにしてはどうか。

『子供劇場』誕生記

三河尻　修　二
県児童文化研究会長

S市に子供劇場ができるというので、さっそくたずねてみた。

この子供劇場ができるようになったきっかけは、S市にある人形劇サークルのKさんと、社会教育主事のAさんとの話し合いである。

Kさん達のグループは、毎年新しい人形劇を創り、僻地の学校を巡回して上演したり、市の公民館を借りて発表会をもったりしていた。ところが、一番困るのは練習をする会場がないことだった。それに、人形や道具を置く場所もなくて困っていた。市がいつでも練習できる場所を提供してくれたらなあと思っていた。

一方、Aさんは子供達の夢を与え、創造性を培うような機会をつくりたい、芸術文化を振興していくためには、子供の時からその芽を伸ばしていかなくてはいけないと思っていた。

たまたま一杯飲んだ時に話がでて、それではいっしょに考えてみようということになった。

練習場というより、むしろ劇場にしよう。公演しない時には、そこが練習場になるではないか。また、Kさん達のサークルだけでなく、演劇をしたい人には誰でも貸してあげよう。特に子供達が自分達もやってみようというようになれば大変うれしい。

子供達に創作させるとしたら、指導者がいる。それではKサークルの人達に指導者になってもらおう。さらに、Kサークルを子供劇場の専属劇団にしよう。そして、毎週土曜日の午後と日曜日の午前と午後に公演してもらい、子供達にみてもらおう。アマの人達に毎週新しいレパートリーというのは無理かもしれない。1カ月は同じものをしてよいではないか、観る子供たちが違うのだから。それに一つの劇団だけでなく、他の劇団の応援をたのんでもよいし、子供達で創ったものを観せてもいいじゃないか。

劇場もあまり大きなものはいらない。一寸した舞台と、50〜60名入れる客席。客席は固定した椅子席にするのでなく、床にやわらかいカーペットを敷いて坐って観てもらおう。

劇がない時は室内ゲームの場所にも、練習場にも、会議場にもなるだろう。

それに、せっかくだから児童図書館も設置しよう。そうすれば子供達が読書にも集まってくるだろう。いっそのこと、子供劇場のまわりを子供達の遊び場にしたらどうだろう。それも従来の公園のように既設の遊具など置かず、砂を積んでおいたり、丸木をころがしておいたりするだけの原っぱで、まわりに木だけはふんだんに植えたい。

子供劇場の入場料は大人も子供も百円にしよう。大した額にはならないが建物の維持管理の一部や、劇団の材料費にはなるだろう。

このような構想のもとに青写真をつくっているということだ。[redacted]

〝最優秀に大分工業高校〟

—九州高校演劇コンクール—

12月17・18日、宮崎市の県民文化ホールに九州各県から12校が参加して行われた第19回九州高校演劇コンクールに於いて、大分工業高校の「さよなら僕たちの瓜生島」が最優秀校に選ばれた。

この作品は生徒の自作・自演・自演出として県大会でも注目されたもの。同校は53年8月、高知市で行われる全国コンクールに出場する。

かわの眼科
河野　彰
大分市府内町2丁目5－9（トキハ北口通り）
TEL　大分（0975）32—2480
時間外　36—7547

第13回大分県芸術祭賞決まる

昭和52年12月9日に開催された大分県芸術祭運営協議会において決定した芸術祭賞および感謝状が下記のとおり贈呈された。

なお、第13回大分県芸術祭賞・感謝状贈呈式は、昭和52年12月22日（木）11時30分から大分総合庁舎63会議室において行われた。

◎芸術祭賞

◦歌劇「カルメン」　大分県民オペラ協会

開幕行事として、大作オペラの一つ「カルメン」全四幕を上演。長期間に亘る綿密な練習の成果を発表し県民文化の向上に寄与した業績により表彰する。

◦演劇「扉を開く人たち」　大分県民演劇制作協議会

閉幕行事として、きびしい練習を経て、郷土の先覚者前野良沢に素材を求めた〃蘭学事始・前野良沢伝扉を開く人たち〃を上演。良沢の人間像を県民に普及させるとともに、県民文化の向上に寄与した業績により表彰する。

◦日本舞踊「点と線」　大分県日本舞踊連盟

共催行事として、同連盟は流派をこえた創作「点と線」を上演。その内容は高度な舞踊技術の集積であり本県文化の向上に寄与した業績により表彰する。

◎感 謝 状

◦特別感謝状　藤 間 章 作

共催行事「花と月とは・点と線」の実施にあたり、大分県日本舞踊連盟のために「点と線」を創作するとともに、真摯な指導により公演の成功に寄与した功績により感謝状を贈呈する。

◦特別功労賞　村上天心遺作展実行委員会

参加行事として、杵築市に深いゆかりをもつ宇和島生まれ村上天心の生誕 100年を記念し芸術作品およそ100点を、 村上天心遺作展として杵築市安住寺において実施し、本県文化の普及向上に寄与した功績により感謝状を贈呈する。

◦感謝状　参 加 62 団 体

芸術祭に参加して諸行事を実施し、本県文化の向上発展に寄与した功績により感謝状を贈呈する。

文化ニュース

◉「ヴュィヤール展」鑑賞の感想文募集について

県教育委員会・県立芸術会館・ＴＯＳテレビ大分・読売新聞社西部本社の主催により、県立芸術会館において12月10日～１月８日までの間「ヴュィヤール展」が開催されました。

なお、「ヴュィヤール展」鑑賞の感想文募集を次の要領で行っています。

記

1　応募資格　県内小・中・高校児童生徒

2　応募規定

ア　400字詰め原稿用紙３枚以内、 学校単位でとりまとめて送付のこと。

イ　住所、氏名、学校名、学年を明記のこと。

3　送 り 先　大分市府内町３―10―１（〒870）
県教育庁文化課内
「ヴュィヤール展」感想文係

4　受付期間　昭和53年１月15日まで

◉第７回九州グラフィックデザイン展

九州文化協会・県教委共催、後援県芸振による標記展覧会が、昭和53年１月11日から１月19日の間、県立芸術会館で開催されます。

入場料無料・月曜日と国民の祝日は休館です。

展示点数は、およそ150点です。

なお、九州芸術祭賞入選者は北九州市の野間口熱氏のほか、大分県知事賞に大分市の天野ともお氏、鹿児島県知事賞に大分市の佐藤邦生氏が賞に入選、そのほか本県関係者の作品も展示されます。

◉杵築市・民謡全集・盆おどりくどき集発刊

杵築市民謡研究会では、ふるさとの郷土民謡等を長く継承・保存する目的で、杵築民謡全集付盆おどりくどき集を発行した。Ｂ６版350頁。申込みは、 杵築市弓町・杵築郷土民謡研究会（代表岩田清顕）まで。